普段着のわたしたち

先月の中秋の名月の、次の日の名月です。写真が好きで、月の写真を撮りたいのですが、どうも忘れっぽいのです。

来年こそは中秋の名月に忘れずに撮りたいですね。　征阿

しいたけ栽培キットを購入。２週間ほどでニョキニョキ生え、息子が楽しそうに十数枚収穫しました。

その後、もう一度生えてくる予定でしたが、どこでどうヘソを曲げたのかしめじ程度のチビたものしか生えてきません。菌床の下の方は全く生える気配もありません。

正月のすき焼きの具に使えるだろうか、と長期間食せることを目論んでいましたが、なんともあっけない。

いささか不満ですが、息子が「しいたけはこのように生える」と知ったということで、良しといたしましょうか。

訶梨帝母

友引ショッピング広告　秋の夜長、いびきをかいているご主人の横でふと…「私の人生って輝いたことなんてあったのでしょうかぁ～」などと、ため息をついた奥様！今回ご紹介するのは「クリスタル位牌」です。

台座部分に特殊な加工と呪いがしてあります。今流行のお洒落な家具調佛壇にはもちろんのこと薄暗い先祖代々のお佛壇のわずかなお燈明の光でも虹のように七色に光輝きます。見る方向によってその美しさは幾通りにも変化いたします。もちろん！ご主人の戒名と並ぶことなど絶対にありません。奥様お一人だけの戒名が丁寧に刻まれ永遠の輝きが与えられます（※注意　この条件を満たすには必ずご主人より長生きしてください、たぶん大丈夫だと思いますけど…）　俊徳丸

運動不足を補うため医師の勧めで散歩を始めました。ストレスをため込みやすい性格ですので、広々した空間は癒されます。これからは毎日歩くことにします。　迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/　「友引町内会通信」をクリックしてください。

寺務局

こもりうた71

「時は元禄15年師走半ばの14日、江戸の夜風を震わせて響くは山鹿流の陣太鼓…」。以前も12月号で書きましたが、久々に風物詩「忠臣蔵」のお話など。

（泉岳寺参道で買った塩）

昨年『決算！忠臣蔵』という映画がありました。勧善懲悪、判官贔屓、武士道礼賛、ティッシュを抱えて泣きながら見たい、という方には叱られそうな内容。ゲラゲラ笑いながら忠臣蔵を見たのは初めてです。製作に吉本興業が関わっていて、吉本のベテラン勢も多く出演し、関西弁が飛び交うので言葉の「音」が面白さに拍車をかけます。

「そうそう！赤穂も関西弁。きっとこんなやりとりだったに違いない」と新鮮な感動すらいたしました。

「そば1杯16文＝480円」から始まり、討ち入りまでに資金が保つかという、ほぼほぼ「銭」の話。開始から約5分で、松の廊下刃傷沙汰→内匠頭切腹→赤穂藩御取潰し（倒産）という見所がさらっと流れ。その後は事に応じて「チャリン￥」と残高が字幕スーパー表示されます。籠城すると割賦金（退職金）が￥。素直に城開け渡しすれば割賦金＋給与1年分。内匠頭墓所建立佛事全般で1500万。江戸と赤穂を往復すると72万／人。内蔵助は山科に隠棲する前に御妾さんにも退職金180万（×4人）。その時点で残高9,491万円（790両2朱銀46匁9分5厘）。まだ討ち入りは先の先。浪士たちの家賃店賃生活費。浅野家再興の為の工作費。内匠頭一周忌には残高3500万まで減。いよいよ三回忌の元禄16年3月14日に討ち入ると決めたものの、刀がない、槍がない、松明がいくら、梯子がいくら。着こみ（鎖帷子）手甲脚絆、結構お高い。死ぬ覚悟やしぃ人数分も要らんのと違いますう～等々。ここで既に赤字。資金が保たないので3ヶ月早めよか～の顛末。終始セコい話で笑えるのですが、内蔵助最後の東下りの時、

浪士「今回の旅費は36万、えらい安うすみましたな。これまで贅沢しすぎですわ」

内蔵助「ちゃう。片道だからや」

の台詞にはやはりやられました。

過日、東京諸用ついでに母と息子を連れ高輪泉岳寺へ墓参。50円で線香を1束買い1本ずつ手向ける息子。

「これは誰のお墓？つまらない。もう帰りたい」と言いながら。さもありなん、赤穂義士の漫画でも見つけたら読ませてやりたいと思います。

訶梨帝母

佛前結婚式

何年か前の晩秋に、朝起きた時にひらめいて新幹線に飛び乗り広島の厳島神社へ行ったことがあります。到着すると偶然満潮で神殿の奥まで海水が満ちていていました。水面に浮かぶ朱色が本当に美しかったのを忘れません。またこれも偶然でしたが「結婚式」が行われていました。海に浮かぶ朱色の回廊を真っ白なお嫁さんがゆっくり歩く姿はこれまた美し過ぎでした。日本古式の結婚式も捨てたものではありません。ただ後で聞いた話ですが、ここでの結婚式は人気があって予約を取ることは困難だそうです。

神社だけではなくお寺でも結婚式をさせていただいております。あまり知られていませんが。以前勤務していた京都の有名寺院では年に数回ありました。当時はオーソドックスな式場のパックプランの式では嫌だというこだわりのあるカップルがお寺でされていましたように思います。例えばプロカメラマンとモデルさんのカップルとかです。だから私は他のお寺さんより結婚式に携わった経験はずっと多いと思います。

先日依頼されて「佛前結婚式」の仕事をさせていただきました。キリスト教の結婚式で言えば神父さんの役の僧侶と、あと数人の僧侶スタッフがいれば立派な式ができます。式の流れはキリスト教の流れに似ています。佛前にて新郎新婦が「私たちはいつまでも、生涯を通じて明るく仲良くします」と誓ったのち更に、①規則正しい秩序正しい生活をすること　②自己に与えられた責任・使命を全うすること　③世のため人のために喜んで働くこと　この三つを司婚師（神父さんにあたる僧侶）が「よく保つや否や」と新郎新婦に尋ねると「よく保つ」とお二人が返事をして佛さまに誓いを立てます。それが終わり佛教式に念珠の授与交換を執り行います。今回お二人は結婚指輪をお作りになったということで、せっかくなので指輪の交換もアドリブでいたしました。

日本古来の結婚式は神や佛など宗教は関与せず行われました。今でいうところの「人前結婚式」です。立会人が見届けるだけです。更に必ず夜に執り行われることが特徴です。日本で初めて現在のような神社における結婚式をされたのは案外最近で明治 33 年 5 月 10 日、大正天皇です。当時の「西洋文明」を意識しキリスト教の式をコピーしたものと感じます。それを更にコピーしたものが佛式結婚式だと言えましょう。　　俊徳丸

『私説法然伝』（71）

往生する人たち⑦

先月号では法然上人が平重衡に授戒をされた事の考察を書きました。今月号はその続きについて書きます。

【『平家物語』での平重衡が法然上人と会われてから、鎌倉への護送と南都への引き渡しから処刑までの記述を読むと、およそ「佛敵（ぶってき）」の「極悪人」ではなく、むしろ知性と教養を兼ね備えた平家の貴公子といった感がある。何より死を前にして取り乱す事もなく、ただひたすら佛を頼む姿には、むしろ「佛道」的な趣さえ感じられる。法然上人による「説法」と「授戒」が重衡にとっては重要であったのだろう。「本願念佛」とは何か？そしてそれが確実に殺されるであろう重衡にとって何を意味するのかという事を考えていくと、重衡の最後の言葉である「逆縁（ぎゃくえん）を以て順縁（じゅんえん）とし」から伺い知る事ができる。逆縁とは佛の道に反するという意味であるが、重衡にとっては「南都焼討」は逆縁であったという事である。その行為の結果、南都の寺社勢力から「佛敵」とされ殺される事になる。だが、それによって結果的に法然上人から説法と授戒を受け、本願念佛という順縁＝佛の教えに従う事が出来たのである。重衡は悲劇的な最後を迎える事になったが、それは一面であり、もう一面には「本願念佛」という面があった。重衡という人の最後は、ただ処刑される「極悪人」では無かったのである。

法然上人が重衡に伝えたかった事は何かと考えていくと、重衡の言葉にあるように「逆縁」を「順縁」にという「転換」はその一つであろう。善い悪いというものは縁によるものであって、縁とは自分の力や行いだけではどうしようもない事でもある。重衡は軍人として行動し、結果的に「極悪人」となったが、それは自分自身だけで決めて行った事ではない、そういう縁に依った結果でもある、という事である。法然上人自身も武家の子として生まれ、武家として生きていたならば、重衡と同じ境遇になったかもしれない。つまり人生とは縁に依り、どこでどうなるかというのは自分自身で決められるものでもなく、善だ悪だというものも縁によって成り立ち、縁によって善にもなり悪にもなる、という事である。】

『平家物語』における重衡の最後は悲劇的でありながらも非常に落ち着いたものです。「逆縁を以て順縁とし」という言葉からは重衡の胸中と考え方が伺いしれます。悪であるから善＝佛というものが見えてくる、そう言い換える事もできるでしょう。

以下次号に続く（征阿）

真に面目ない

11 月２日、大腸の内視鏡検査を受けました。診断は「がんです。間違いありません」。到頭順番が来たかぁ、という感じでした。

検査の翌日、ウチのカミさんが１冊の本を私に薦めました。船戸クリニック院長、船戸崇史氏の『がんが消えていく生き方』です。「がん治療において最も重要なことは、まず生き方（生活習慣）を正すこと」と書いてあります。曰く、すべての義務感から己を解き放て！ 今日一日を大事に生きろ！

映画『カサブランカ』の有名なセリフがちらつきました。質問ぜめで主人公リックに迫る女性がいます。「昨日はどこに？」「そんな昔のことは覚えてない」「今夜会える？」「そんな先のことは判らない」

現代は、２人に１人（50 %）ががんになる時代だそうですが、本当は健康な人の身体の中でも、毎日５千個ほどのがん細胞が作られているのですね。自然発生するがん細胞を、免疫細胞（リンパ球）が退治しています。治るようになっているのに、２人に１人ががんになるのは、がんを消す仕組みを邪魔する生活習慣を続けているからだそうです。「がんの言い分」を聴いて、自然治癒力を上げること。これはすべての病気に当てはまるでしょう。

がんに克つ五か条が書いてあります。

①ねわざ”睡眠”
②たべわざ”食事”
③うごきわざ”運動”
④あたためわざ”加温”
⑤わらいわざ”笑い”

全部 XXX でした。

①随分以前から良質な睡眠がとれていません。
②直ぐ仕事に掛かりたいから早食いです。
③散歩もしていませんでした。
④冷たい食べ物や飲み物が好きです。
⑤笑うことを忘れて、むしろ笑いを抑え込んでいました。先輩の僧侶で檀家さんから言われた人がいました、「お通夜の説法で笑いを取ろうとするのだけは止めて欲しい」。

船戸先生との面談中、笑いの話に来た時に、今後は笑いを取り戻しますと宣言しました。「内視鏡センターでは、胃カメラを飲む人と、大腸検査の人が一緒に待っているでしょう。私の検査で肛門から入れた内視鏡を、忙しい先生が間違えて次の人の胃に入れたら・・・」

「いえ、形が違いますから間違えることは絶対にありません」

解ってるっちゅうねん。冗談やがな、もう。

がんになりやすい人とは、①我慢して②頑張る③頑固者(3G)だそうです。カミさんから、私は３つとも当てはまると念を押されました。

娘からは回遊魚と言われていたようです。死ぬまで動き回っている。止まったら死ぬ。暫く休筆して治療に専念します。I'll be back!

迷走坊

続・観経物語（１８）

観経要讃（十七）

勢至菩薩は知慧を持て
　普く照らすみひかりに
三途の冥は打ち破れ
　こよなき力ぞ與えらる

勢至菩薩は前回で取り上げた観音菩薩と共に阿弥陀佛の脇侍の菩薩として知られていますが、その実態はよく知られているとは言いがたいものがあります。と言うわけで今回は勢至観です。勢至菩薩を観察するとは何をどの様にするのか。身体の大きさはどうか？身体の色や輝きかたはどうか？顔つきは如何か？身体から放たれる光りはどうなのか？白毫から放たれる光りはどのような様子なのか？これらを順次観察するわけですが、これについて観経では「この菩薩の身量、大小、また観世音のごとし」として、大まかな形態などは、観音菩薩とほぼ同じとしています。と言うことは観音菩薩は、阿弥陀佛とその身量では、ほぼ同じ、と「真身観」のところで明らかにされていますから、勢至菩薩は阿弥陀佛と大きさや形では、ほぼ同じといえるのです。阿弥陀佛と観音、勢至両菩薩が大きさや身量などで等しい事は、働き方や役割などの表相だけを見ていると、失念しがちですがその本質を考えるとき、法性として同質である事を表していると理解できるのです。しかし、本質が法性であることを私達凡夫は理解できません。私達に理解できるのは慈悲の心の働きとして、この世にすがたや形を表している「用」とか「事」のところです。そこで「観経要讃」を書き顕された関本諦承師も、観経もしくは阿弥陀佛の宗教的本質部分の追求ではなく佛の働きかけを論じて、そこから本質に至ろうとされているのです。それで師は観経の次の部分の「（勢至菩薩の）円光の面は各々百二十五由旬にして、二百五十由旬を照らす。～但此の菩薩の一毛孔の光を見るのみにして、即ち十方無量の諸佛の浄妙の光明を見る。～此の菩薩を号して無辺光と名づく。知恵の光を以て、普ねく一切を照らし、三途を離れて、無上の力を得さしむ。是の故に此の菩薩を号して大勢至と名づく。」とあるのを、観音菩薩と相違する表現で「用」の特徴が示されていると受け止められて、そのまま訳文のように要讃を造られたのです。そして要讃では勢至菩薩の本体は無漏で「智恵」であるとさりげなく示し、そこから醸し出される「用」という働きが凡夫が作り出す地獄、餓鬼、畜生の苦の業因を滅し尽くす、大きな働きを振り向けられる徳用までもまとめて説明されているのです。

《妙星斎》